

愛知県立吉良高等学校の取組（地理歴史科・公民科）

－第2学年普通科「倫理」における調査研究（1年目）－

1 はじめに

本校は、愛知県西尾市南部に位置する普通科と生活文化科の併置校である。昭和39年に家政科単独校として創立され、昭和60年に普通科が新設された。各学年は、普通科4クラスと生活文化科2クラスの計6クラスから成る。卒業後の進路については、約6割の生徒が大学・短大への進学、約2割の生徒が専門学校への進学、そして残る2割の生徒が就職となっている。部活動や学校行事は盛んであり、中でも本年度で29回目となる生活文化科の卒業研究作品発表会は、地元の中학생や保護者、地域の方々をお招きし、毎年盛大に執り行うことができている。

本校の生徒は、のどかで穏やかな環境に育ち、明るく素直である。海に面した本校の普通科教室では、落ち着いた雰囲気の下、生徒たちが勉学にいそんでいる。しかし、のどかな環境にある故か、本校の生徒の多くは自ら行動をおこすことが苦手であり、むしろ他人に流されやすく、周りの様子がかがいがながら行動する傾向にある。自ら決断し行動できるたくましい生徒を育成することは、本校の長年にわたる課題である。

2 研究の目的

自ら決断する力の育成のために、本校の地理歴史科・公民科が果たしてきた役割は、必ずしも十分とは言えない。これまでに行ってきた授業や定期考査の中で、意思決定を迫る場面について数多く設けてはこなかったからである。そこで本校は、主に意思決定等に関わる能力を育成する取組として、この研究を捉えた。具体的には、パフォーマンス課題により生徒の「課題解決力」や「意思決定力」等を可視化し、その達成度をルーブリックにより評価することで、生徒の成長に資する授業の在り方を追究しようと考えた。また、身近な地域に題材を求めたパフォーマンス課題を用意することで、生徒の学習意欲を喚起するとともに、社会への参画意識を涵養することも視野に入れた。

この研究を通して、解決に向けて自ら課題に取り組む自主性と、他人に流されない自律心、そして、よりよい社会づくりのために貢献できる市民性が生徒の中に芽生えることを目指した。

3 研究の方法

本年度は、第2学年の倫理の授業において研究を進めた。身近な地域を題材としたパフォーマンス課題を用意し、その解決策の考察を中核とした単元を構想して、2学期及び3学期にそれぞれ一回ずつ研究授業を実施した。生徒には、課題の解決策について考察する際、その理論的根拠を先哲等の思想に求めることを条件として課した。

生徒は、主にグループワークを通じて学習を進め、単元の終末には個人で改めてパフォーマンス課題に取り組み、学習成果を表出した。また、グループワークやパフォーマンス課題への取組状況については、ワークシートにおいて自己評価及び感想を記述することによって振り返る機会をもった。

生徒のパフォーマンスを評価するルーブリックにおいては、批判的思考力や課題解決力、さらには意思決定力といった、これまでの授業や定期考査では測ることのなかった能力をも解釈できるような記述を心がけた。そして、このルーブリックを基に、3名の研究員が協議を行い、生徒のパフォーマンスを三段階で評価した。なお、パフォーマンス評価の在り方については、評価結果以外にワークシ

ート上の自己評価及び感想の記述内容をも資料とし、検証を行った。

この他の取組として、4月から单元ごとの振り返りシートを利用し、自分の意見を文章にするトレーニングを生徒に課した。振り返りシートについてはポートフォリオとしてまとめさせ、文章表現等の向上を自身で確認させた。また、先哲の思想を根拠とした意見表明を夏季休業中のレポート課題とするなど、2学期までの期間を研究の助走段階に充てた。

なお、単元の構想及び研究授業の詳細については、事前の校内委員会等で協議するとともに、顧問を務めていただいた愛知教育大学の土屋武志教授の指導を仰いだ。協議が足りない場合は、メールを通じ、総合教育センター所員との間で意見を交換した。

校内委員会等の日程及び内容等については、以下のとおりである。

<校内委員会等について>

○総合教育センター所員との顔合わせ 平成26年4月30日（水）、会場：本校

- ・出席者 総合教育センター研究部長，総合教育センター所員3名，本校校長，本校教頭2名，本校研究員3名
- ・内容 研究の概要について

○顧問との打ち合わせ 平成26年5月20日（火）、会場：愛知教育大学

- ・出席者 土屋武志教授，総合教育センター所員1名，本校研究員1名
- ・内容 第1回研究授業の単元構想について，パフォーマンス課題について

○第1回校内委員会 平成26年6月20日（金）

- ・出席者 総合教育センター所員1名，本校校長，本校教頭1名，本校研究員3名
- ・内容 第1回研究授業におけるパフォーマンス課題及びブルーブリックの作成について，今後の研究計画について

○第2回校内委員会 平成26年8月5日（火）

- ・出席者 総合教育センター所員1名，本校校長，本校教頭1名，本校研究員3名
- ・内容 第1回研究授業の学習指導案について，今後の研究計画について

○顧問との打ち合わせ 平成26年8月29日（金）、会場：愛知教育大学

- ・出席者 土屋武志教授，総合教育センター所員1名，本校研究員1名
- ・内容 第1回研究授業について

○第3回校内委員会 平成26年9月25日（木）

- ・出席者 土屋武志教授，愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事1名，総合教育センター所長，総合教育センター研究部長，総合教育センター所員3名，本校校長，本校教頭1名，本校研究員3名
- ・内容 第1回研究授業及び研究協議

○第4回校内委員会 平成27年1月13日（火）

- ・出席者 土屋武志教授，柴田好章准教授（評価手法検討会議座長），愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事1名，総合教育センター所長，総合教育センター所員4名，県立高等学校校長はじめ高等学校教員36名，市内中学校教員5名，本校校長，本校教頭1名，本校教員2名，本校研究員3名
- ・内容 第2回研究授業及び研究協議（研究発表会）

なお、上記の他、評価手法検討会議及び評価手法研究協議会においても、協議の時間をもった。

4 研究の実際

(1) 第1回研究授業

ア 単元構想及び学習指導案

海に面した本校では、津波被害を想定した防災訓練を毎年実施している。そこで、第1回の研究授業を行う単元では、災害時の対応を身近な題材として取り上げることとした。具体的には、阪神・淡路大震災を題材としたモラルジレンマ教材をアレンジし、岐路に立たされた主人公が取るべき「道徳的な行為」について、生徒に二者択一を迫った。さらに、意思決定の根拠として、カント、ベンサム、ミルの3人の思想家が説く「道徳的な行為」の中から最適と考えたものを選ばせた。

以下に学習指導案を記す。

1 教科・科目	公民・倫理														
2 単元名	自己実現と幸福														
3 単元の目標	(1) 民主社会において、自由の中で道徳的に生きるとは、どのような生き方であるか考えさせる。 (2) 現代の倫理的課題を考察するための視点や原理について、思想家や先哲が追究した内容を通して理解を深めさせ、さまざまな意見や異なる立場の存在を前提として、自己の生き方に関わる固有の判断基準を形成させる。														
4 単元の指導計画（全6時間）	<table border="1"> <thead> <tr> <th>配当時間</th> <th>指導内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1次（1時間）</td> <td>○パフォーマンス課題（モラルジレンマ教材）の提示とグループづくり ・モラルジレンマ教材「大津波」を読ませ、読み終えた時点における自身の考えをワークシートに記入させる。 ・4人程度のグループをつくらせ、グループ内で意見交換をさせる。</td> </tr> <tr> <td>2次（1時間）</td> <td>○パフォーマンス課題への取り組み1 ・パフォーマンス課題にグループで取り組ませる。 ・教科書を通して、カント、ベンサム、ミルの思想に触れさせる。</td> </tr> <tr> <td>3次（1時間）</td> <td>○パフォーマンス課題への取り組み2 ・カント、ベンサム、ミルの説く「道徳的な行為」をグループで解釈させる。 ・各思想家の考えを教師が解説する。 ・思想家をグループごとに割り振り、その思想家の考えに立てば、この場面で主人公はどのような行動を取るべきかをグループ内で検討させる。</td> </tr> <tr> <td>4次（1時間） ※本時</td> <td>○パフォーマンス課題への取り組み3 ・各グループの考えを発表させる。 ・グループ発表後、個人でパフォーマンス課題に取り組ませる。</td> </tr> <tr> <td>5次（1時間）</td> <td>○成果の共有と振り返り ・個々の生徒によるパフォーマンスの幾つかを取り上げ、共有化を図る。 ・学習の振り返りとして、自己評価及び感想を記述させる。</td> </tr> <tr> <td>6次（1時間）</td> <td>○他の思想家の理解 ・ヘーゲル及びデューイの思想について講義する。</td> </tr> </tbody> </table>	配当時間	指導内容	1次（1時間）	○パフォーマンス課題（モラルジレンマ教材）の提示とグループづくり ・モラルジレンマ教材「大津波」を読ませ、読み終えた時点における自身の考えをワークシートに記入させる。 ・4人程度のグループをつくらせ、グループ内で意見交換をさせる。	2次（1時間）	○パフォーマンス課題への取り組み1 ・パフォーマンス課題にグループで取り組ませる。 ・教科書を通して、カント、ベンサム、ミルの思想に触れさせる。	3次（1時間）	○パフォーマンス課題への取り組み2 ・カント、ベンサム、ミルの説く「道徳的な行為」をグループで解釈させる。 ・各思想家の考えを教師が解説する。 ・思想家をグループごとに割り振り、その思想家の考えに立てば、この場面で主人公はどのような行動を取るべきかをグループ内で検討させる。	4次（1時間） ※本時	○パフォーマンス課題への取り組み3 ・各グループの考えを発表させる。 ・グループ発表後、個人でパフォーマンス課題に取り組ませる。	5次（1時間）	○成果の共有と振り返り ・個々の生徒によるパフォーマンスの幾つかを取り上げ、共有化を図る。 ・学習の振り返りとして、自己評価及び感想を記述させる。	6次（1時間）	○他の思想家の理解 ・ヘーゲル及びデューイの思想について講義する。
配当時間	指導内容														
1次（1時間）	○パフォーマンス課題（モラルジレンマ教材）の提示とグループづくり ・モラルジレンマ教材「大津波」を読ませ、読み終えた時点における自身の考えをワークシートに記入させる。 ・4人程度のグループをつくらせ、グループ内で意見交換をさせる。														
2次（1時間）	○パフォーマンス課題への取り組み1 ・パフォーマンス課題にグループで取り組ませる。 ・教科書を通して、カント、ベンサム、ミルの思想に触れさせる。														
3次（1時間）	○パフォーマンス課題への取り組み2 ・カント、ベンサム、ミルの説く「道徳的な行為」をグループで解釈させる。 ・各思想家の考えを教師が解説する。 ・思想家をグループごとに割り振り、その思想家の考えに立てば、この場面で主人公はどのような行動を取るべきかをグループ内で検討させる。														
4次（1時間） ※本時	○パフォーマンス課題への取り組み3 ・各グループの考えを発表させる。 ・グループ発表後、個人でパフォーマンス課題に取り組ませる。														
5次（1時間）	○成果の共有と振り返り ・個々の生徒によるパフォーマンスの幾つかを取り上げ、共有化を図る。 ・学習の振り返りとして、自己評価及び感想を記述させる。														
6次（1時間）	○他の思想家の理解 ・ヘーゲル及びデューイの思想について講義する。														

5 本時の展開			
	学習活動（生徒）	指導上の留意点（教員）	評価の観点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 発表準備をする。 グループごとに机をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習内容及び本時の活動内容を確認する。 	
展開 20分	<ul style="list-style-type: none"> 各グループで検討した主人公の取るべき行動について、グループの代表者が発表する。 ◇カント担当：3グループ ◇ベンサム担当：4グループ ◇ミル担当：4グループ 各グループの発表の要点について、ワークシートにメモをとる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表時間は1分程度とする。 発表後、授業者は発表の要点を復唱する。 必要があれば、各思想家について補足説明をする。 記入状況をT. T.（研究員2名）とともに巡回し確認する。 	
まとめ 25分	<ul style="list-style-type: none"> 各グループの発表等も適宜参考にし、改めて個人として主人公の取るべき行動を考え、ワークシートに記入する。 時間に余裕があれば、主人公を消防士以外の立場に置き換えて、取るべき行動を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自身が所属したグループの意見に縛られず、各自が判断した主人公の取るべき行動をワークシートに記入するよう伝える。 「根拠を示して」とは言わず、あえて「これまでの内容を踏まえて」等のアドバイスにとどめる。 当初の考えから変容した生徒に挙手をさせ、人数を確認する。 次回の予告をする。 	思考・判断・表現

6 評価手法
(1) パフォーマンス課題
<p>「大津波」</p> <p>Aさんは大学卒業後に帰郷し、救急隊員として三河地区のある消防局に勤務している。彼は「救急隊員となり人命救助に貢献すること」という夢をかなえたのであった。</p> <p>Aさんは大学生の頃に東日本大震災に遭った。下宿が全壊し、友人が瓦礫の下に埋まって途方に暮れていたとき、友人を救助してくれたのが救急隊員であった。それ以来、救急隊員は就きたいと考えていた職業だった。今年で勤務4年目であるが、仕事ぶりが評価され、災害特別チームに抜擢されていた。</p> <p>一方、私生活では、3年前に結婚して自身の家庭を築き、出産間近の妻と2歳になる子どもに囲まれ、充実した日々を過ごしていた。</p> <p>ある日の午後、非番だったAさんは、電車で1時間ほどの名古屋市へ買い物に出かけた。そして買い物を終え、家路に着こうとした正にそのとき、大きな地震が起こった。激しい揺れに驚いたが、辺りに大きな被害はなさそうであった。</p>

被害を確認したところ、震源地は三河湾であることが分かった。あわてて勤務先の消防署に電話をかけてみたがつながらず、今度は自宅にいるはずの妻に電話をかけてみたものの、やはりつながらない。急いで駅に行ってみると、電車は新安城駅から運転見合わせになっていた。早く戻ることを考えてタクシーに乗り込んだが、かなり手前のところで渋滞に巻き込まれやがて車は全く動かなくなった。Aさんは、仕方なく徒歩で移動することにした。

胸騒ぎを覚えながら歩いていると、市街地の電光掲示板に衝撃的なニュースが流れた。自宅のある吉良町で、津波が発生したというのだ。家屋は倒壊し、電車も不通になり、多数の死傷者が出ている模様で、町は壊滅的な状態とのことであった。

「急いで、戻らなければ・・・」

焦る気持ちと同時に、さまざまな思いがAさんの脳裏を駆け巡った。数人のメンバーが常時詰めてはいるが、一刻も早く消防署に駆けつけて、災害対策に当たらなければならない。しかし、一方では安否の確認が取れない家族のことも気になる。Aさんの住居はアパートの1階にあり、そこからは海も近い。

「東日本大震災の時のように、倒壊した後で津波にさらわれていないか・・・」

家族は無事であると信じたいが、不安で仕方がない。自宅のある吉良町に向かうか、消防署に向かうかの決断ができないまま、Aさんは岐路に来てしまった。

Aさんはどうすべきですか？自宅に行くべきですか？消防署に向かうべきですか？

(2) ルーブリック

	先哲の思想の解釈（読解力）	結果の整合性（論理的思考力）
A	道徳的な行為とはどのようなものかについて、先哲の思想を正しく解釈している。	主人公の取るべき行動が、先哲の思想を根拠に正しく導かれたものである。
B	道徳的な行為に関する先哲の思想を概ね解釈している。	主人公の取るべき行動が、先哲の思想に概ね沿って考えられている。
C	道徳的な行為に関する先哲の思想の解釈が不十分である。	主人公の取るべき行動が、先哲の思想から正しく導かれていない。

イ 研究授業，研究協議を終えて

(ア) 研究授業

平成26年9月25日の第5限に、本校2年生の理系クラス（男子36名、女子4名、計40名）で研究授業を行った。展開部では、発表する生徒、発表に耳を傾けつつメモを取る生徒のいずれの側にも熱心に取り組む姿勢が見られた（資料1）。1学期以降、自身の考えを練り上げるトレーニングを継続したことや、単元の始まりからグループワークを取り入れたこと等が功を奏して生徒の意欲を喚起し、学びを深めたものと思われる。この姿は、他の2年生普通科クラスにおいても同様に見られたものであり、今回が成功体験

【資料1 発表風景】



となって自信をもち、自主的な学びに目覚める生徒が増えるだろうことを十分に期待させた。

終末における個々のパフォーマンス課題への取組には、多くの時間を割くことはできなかったが、思考の変遷を丁寧に綴り、かつ貪欲に課題を追究する様子が見て取れるような、目を見張る作品もあった（資料2）。生徒の潜在能力を引き出すよう授業をデザインすることが大切であると思い知った。

【資料2 生徒Aの作品】

僕は最初、Aさんなら消防署へ行くべきだと考えていました。なぜなら、カントの考え方では「君の行為の格率が君の意志によってあたかも普遍的自然法則となるかのように行為せよ」と言っていて、これを「万人に認められるものであるようにせよ」ということだと解釈し、消防署へ向かい消防士としての務めをはたすのが正解だと思っていました。

しかし、時間をかけカントのことを調べていくうちに家へ行った方がよいのではないかなと思い始めていました。カントは、上の考え以外にも「正しいとされる行動は無条件に肯定できる」「観客を楽しませるための八百長は悪くない」と言っています。Aさんや僕もそうですが、家族は特別で大切な人達であり、その人達を助けることが正しいと思ったなら、それはよいことだと思ったからです。それに、家族を助けたあとでも急いで消防署へ行くことはできるし、そうした方が家族の心配をせずに、他人を全力で助けることができると思ったからです。

(イ) 研究協議

研究授業後の研究協議では、授業者の振り返りの後、出席者による質疑応答及び感想交流の時間をもった。そのときの主な意見等は以下のとおりである。

<質疑応答>

○この時間で生徒に身に付けさせたいことは何であったか。

→ 根拠をもって自分の答えを出せるか、思想家の考えをしっかりと解釈できるかである。

○ループリックの基準Aと基準Bの境界線はどこにあるか。

→ 曖昧な表現となってしまい、明確に示すことは難しい。生徒の作品を見て考えざるを得ない。

○詳細かつ具体的なループリックを提示しないと、生徒は何をすればよいか分からないのではないか。

→ 生徒がループリックに縛られすぎてもいけないと考え、示さなかった。

○根拠を書くよう指示しなかったのはなぜか。

→ 日頃から生徒には、説明する際に根拠を述べるよう指導していた。そのことが身に付いているかどうかを評価しようと考えた。

<意見・感想等>

○自分で発表した授業は今でも記憶に残っている。生徒にとって印象に残る授業となるであろう。

○普段見ることのできない生徒の姿があった。

○当初とは考えを変えた生徒の人数を授業の最後に調べていたが、なぜ変えたのかが知りたかった。

(考えを変えた) 10人の生徒には、その理由をぜひ発表させてほしい。

○本校の生徒は、中学生時代、授業においてグループの中心となって活躍したわけではない。しかし、リーダーの姿を見ており、学びの手法については知っているはずだった。チャンスがあれば、彼らは主体的に学べると思っていた。その考えは間違っていなかったと確信した。

<土屋武志教授の御指導>

○（【資料2】に挙げた作品について）思想家の考えを引用できている。加えて思考の変化のプロセスが論理的に記述されている。すばらしい作品である。

- 本日の成果をクラス全体、または隣同士などでぜひ共有化してほしい。
- 本日は授業者が主役に見えた。生徒を信じ、補足説明も生徒にさせればよい。または、黒板に各グループの結論を書かせてもよい。
- 他教科の教員が授業を見に来ていたことがすばらしい。本日をスタートラインとし、学校全体を巻き込んで今後も研究を進めてほしい。

ウ 検証

(ア) ルーブリックを用いた評価について

生徒の作品について、ルーブリックを基に3名の研究員で評価した。結果は以下のとおりである。

－対象：研究授業実施クラス40人，【 】内は2年生普通科4クラス150人－

<先哲の思想の解釈（読解力）>

- A：正しく解釈している 7人（17.5%）【35人（23.3%）】
- B：概ね解釈している 15人（37.5%）【70人（46.7%）】
- C：解釈が不十分である 18人（45.0%）【45人（30.0%）】

<結果の整合性（論理的思考力）>

- A：正しく導かれている 9人（22.5%）【38人（25.3%）】
- B：概ね沿っている 18人（45.0%）【79人（52.7%）】
- C：正しく導かれていない 13人（32.5%）【33人（22.0%）】

根拠を挙げるよう指示しなかったために、感想を述べるだけの生徒が多くなるのではないかと危惧したが、大半の生徒は論理的に意思決定をすることができた。ただし、今回のパフォーマンスの基礎となる先哲の思想の解釈については、用語を挙げるだけで解釈には至っていない生徒も少なからず見られ、知識の活用に関する課題が明確になった。

(イ) 自己評価及び感想等について

単元終了後、授業への取組を自己評価させる機会をもち、併せて感想を記述させた。結果は以下のとおりである。

－対象：研究授業実施クラス40人，【 】内は2年生普通科4クラス147人－

◇グループ討議にしっかり参加できたか

- 消極的 0人（0.0%）【4人（2.7%）】 やや消極的 3人（7.5%）【16人（10.9%）】
- 普通 13人（32.5%）【58人（39.4%）】 やや活発 12人（30.0%）【48人（32.7%）】
- 活発 11人（27.5%）【21人（14.3%）】 ※研究授業実施クラスについては無回答1名

◇パフォーマンス課題にしっかり取り組めたか

- 不完全 1人（2.5%）【2人（1.4%）】 やや不完全 3人（7.5%）【18人（12.2%）】
- 普通 19人（47.5%）【78人（53.0%）】 やや完全 14人（35.0%）【47人（32.0%）】
- 完全 3人（7.5%）【2人（1.4%）】

◇授業の感想の主なもの

- ・視野が広がった ・新鮮であった ・楽しかった ・考えることが大変だった
- ・緊張した ・達成感があつた ・発表してみたい ・反論できるとよい
- ・クラス全体で話し合いたい ・社会に出てから必要となる力が身に付く
- ・自分の考えを聞いてもらえるうれしさを味わうことができた

授業に対する自身の取組を肯定的に捉えている生徒が約半数を占めているものの、学習の到達度に満足している生徒は決して多くない。今回の取組は、生徒たちの向上心を刺激したようだ。

エ 成果と課題

(ア) 評価の信頼性、妥当性について

研究協議の場でも指摘されたことだが、ルーブリックにおける基準AとBとの境界線が曖昧になってしまい、評価に随分と苦勞した。評価者となった研究員3名の間でも初見では違いがかなりあり、例えば「先哲の思想の解釈」に関して3名の評価が一致した作品は全体の4割、「結果の整合性」に関して一致した作品は3割弱に過ぎず、その後の調整に時間を要した。ルーブリックはあくまで形成的なものと言われてはいるが、ある程度は基準の差異を明確に示すことが今後の改善点の第一である。

また、ルーブリックの記述が簡素であったために、記述量の多寡は評価に反映できなくなってしまい、研究員の思惑以上により評価を付けざるを得ない作品も散見された(資料3)。パフォーマンス課題における要件の工夫や、ルーブリックをより精緻なものにする等、思考を一定の量に言語化しなければならない状況をつくる必要があると感じた。

【資料3 生徒Bの作品】

消防署に行くと思います。ベンサム
の思想に最大多数の最大幸福で、
やっぱりより多くの命を助けた
方がいいと思ったので、
消防署に行くと思いました。

(イ) 次回の研究授業に向けて

取組には手応えを感じている。今後は、生徒の潜在能力を上手く引き出せるよう、研究員も経験を積むことが大切である。次回に向けて、顧問の土屋教授からは、生徒同士が高め合っていく部分をどう評価するか、また、こだわりのある生徒をパフォーマンス評価でどう生かすかという宿題をいただいた。次回の研究授業では、グループワークの成果物を評価することも視野に入れる必要があるだろう。そして、今回は測らなかった「批判的思考力」や「課題解決力」を反映させたパフォーマンス課題及びルーブリックを作成するとともに、市民性の育成に力点を置いた単元づくりを考えたい。

(2) 第2回研究授業

ア 単元構想及び学習指導案

2回目となる研究授業は、学習指導要領の最後の項目「(3) 現代と倫理 イ 現代の諸課題と倫理」において実施することとした。「内容の取扱い」には、学校や生徒の実態等に応じて課題を選択し、主体的に探究する学習を行うことが示されている。そこで今回は、幾つかある課題内容の中から「地域社会」を選び、生徒にとって身近な題材を基に単元を構想することで、市民性を育成しようと考えた。そして、パフォーマンス課題をつくることから始め、以下の内容を素案とした。

- ① 生徒の通学手段である名古屋鉄道の西尾・蒲郡線(通称にしがま線)に関して、実際に取り沙汰されている存廃問題をパフォーマンス課題のベースとする。
- ② 鉄道の存続または廃止によって生じる倫理的課題を生徒に考察させる。
- ③ 倫理的課題の解決の方策(指針・方向性)を先哲等の思想に求めさせる。
- ④ 解決の方策を提言のような形式にまとめさせ、発表させる。

2学期末考査以降の授業では、新聞記事を活用して「にしがま線」の歴史を学んだり、数年前に実施された「にしがま線」存廃に関するアンケートに回答したりするなど、生徒の中に問題意識が芽生えるよう単元をデザインした。また、3次の終了後、冬季休業中のレポートとして、「にしがま線」の存廃に関する現時点での自身の考えを述べるとともに、自分以外の誰かの立場で存廃問題を考察することを課した。

以下に学習指導案を記す。

1	教科・科目	公民・倫理														
2	単元名	現代の諸課題と倫理 地域社会の変容と共生														
3	単元の目標	<p>(1) 「にしがま線」を題材に、地域社会や企業にとっての幸福や正義について、先哲等の思想に照らして考察させる。その際に、異なる意見を認めながらも予想される倫理的課題を挙げて反論させることを通して、批判的思考力及び表現力を身に付けさせる。</p> <p>(2) 地域社会における倫理的課題の解決に関する探究を通して、他者への理解を深めさせるとともに、論理的思考力及び意思決定力を身に付けさせ、総じて市民性を育成する。</p>														
4	単元の指導計画（全8時間）	<table border="1"> <thead> <tr> <th>配当時間</th> <th>指導内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1次（1時間）</td> <td> <p>○地域の課題探究とグループづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの学校がある町には、どのような課題があり、どのような解決策があるのかを考察させる。 ・4人程度のグループをつくらせ、グループ内で意見交換をさせる。 </td> </tr> <tr> <td>2次（1時間）</td> <td> <p>○パフォーマンス課題への取り組み1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの生活に大きく関わる公共交通機関「にしがま線」存廃問題に関するパフォーマンス課題を提示する。 ・新聞記事を活用して「にしがま線」の歴史を学ばせ、かつて実施された「にしがま線」の存廃に関するアンケートに答えさせる。 ・存続派住民、廃止派住民、企業、のそれぞれの立場で、利点と問題点、存続及び廃止によって生じる倫理的課題について考察させ、意見交換をさせる。 </td> </tr> <tr> <td>3次（1時間）</td> <td> <p>○パフォーマンス課題への取り組み2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会や企業にとっての幸福や正義、商業活動の在り方について、ミル、ロールズ、石田梅岩の思想を基にグループで解釈させる。 ・ミル、ロールズ、石田梅岩の思想を教師が解説する。 ・それぞれの思想家ならば、存廃についてどのような意見を述べるのかをグループ内で検討させる。 </td> </tr> <tr> <td>4次（1時間）</td> <td> <p>○パフォーマンス課題への取り組み3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自の冬季休業課題の内容を基に、グループの意見をまとめさせる。 ・グループ発表準備①：グループの意見をワークシートにまとめさせ、これを基に発表台本を作成させる。 ・グループ発表準備②：前半5グループに発表のリハーサル（5分）を実施させる。教師は内容等について助言する。 </td> </tr> <tr> <td>5次（1時間）</td> <td> <p>○パフォーマンス課題への取り組み4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ発表準備③：残る5グループに発表のリハーサル（5分）を実施させる。教師は内容等について助言する。 </td> </tr> <tr> <td>6次（1時間） ※本時</td> <td> <p>○パフォーマンス課題への取り組み5</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループにパフォーマンスを発表させ、内容に関する質疑応答をさせる。 ・各グループに他グループのパフォーマンスへの反論及び評価をさせる。 </td> </tr> </tbody> </table>	配当時間	指導内容	1次（1時間）	<p>○地域の課題探究とグループづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの学校がある町には、どのような課題があり、どのような解決策があるのかを考察させる。 ・4人程度のグループをつくらせ、グループ内で意見交換をさせる。 	2次（1時間）	<p>○パフォーマンス課題への取り組み1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの生活に大きく関わる公共交通機関「にしがま線」存廃問題に関するパフォーマンス課題を提示する。 ・新聞記事を活用して「にしがま線」の歴史を学ばせ、かつて実施された「にしがま線」の存廃に関するアンケートに答えさせる。 ・存続派住民、廃止派住民、企業、のそれぞれの立場で、利点と問題点、存続及び廃止によって生じる倫理的課題について考察させ、意見交換をさせる。 	3次（1時間）	<p>○パフォーマンス課題への取り組み2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会や企業にとっての幸福や正義、商業活動の在り方について、ミル、ロールズ、石田梅岩の思想を基にグループで解釈させる。 ・ミル、ロールズ、石田梅岩の思想を教師が解説する。 ・それぞれの思想家ならば、存廃についてどのような意見を述べるのかをグループ内で検討させる。 	4次（1時間）	<p>○パフォーマンス課題への取り組み3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自の冬季休業課題の内容を基に、グループの意見をまとめさせる。 ・グループ発表準備①：グループの意見をワークシートにまとめさせ、これを基に発表台本を作成させる。 ・グループ発表準備②：前半5グループに発表のリハーサル（5分）を実施させる。教師は内容等について助言する。 	5次（1時間）	<p>○パフォーマンス課題への取り組み4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ発表準備③：残る5グループに発表のリハーサル（5分）を実施させる。教師は内容等について助言する。 	6次（1時間） ※本時	<p>○パフォーマンス課題への取り組み5</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループにパフォーマンスを発表させ、内容に関する質疑応答をさせる。 ・各グループに他グループのパフォーマンスへの反論及び評価をさせる。
配当時間	指導内容															
1次（1時間）	<p>○地域の課題探究とグループづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの学校がある町には、どのような課題があり、どのような解決策があるのかを考察させる。 ・4人程度のグループをつくらせ、グループ内で意見交換をさせる。 															
2次（1時間）	<p>○パフォーマンス課題への取り組み1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの生活に大きく関わる公共交通機関「にしがま線」存廃問題に関するパフォーマンス課題を提示する。 ・新聞記事を活用して「にしがま線」の歴史を学ばせ、かつて実施された「にしがま線」の存廃に関するアンケートに答えさせる。 ・存続派住民、廃止派住民、企業、のそれぞれの立場で、利点と問題点、存続及び廃止によって生じる倫理的課題について考察させ、意見交換をさせる。 															
3次（1時間）	<p>○パフォーマンス課題への取り組み2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域社会や企業にとっての幸福や正義、商業活動の在り方について、ミル、ロールズ、石田梅岩の思想を基にグループで解釈させる。 ・ミル、ロールズ、石田梅岩の思想を教師が解説する。 ・それぞれの思想家ならば、存廃についてどのような意見を述べるのかをグループ内で検討させる。 															
4次（1時間）	<p>○パフォーマンス課題への取り組み3</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自の冬季休業課題の内容を基に、グループの意見をまとめさせる。 ・グループ発表準備①：グループの意見をワークシートにまとめさせ、これを基に発表台本を作成させる。 ・グループ発表準備②：前半5グループに発表のリハーサル（5分）を実施させる。教師は内容等について助言する。 															
5次（1時間）	<p>○パフォーマンス課題への取り組み4</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ発表準備③：残る5グループに発表のリハーサル（5分）を実施させる。教師は内容等について助言する。 															
6次（1時間） ※本時	<p>○パフォーマンス課題への取り組み5</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループにパフォーマンスを発表させ、内容に関する質疑応答をさせる。 ・各グループに他グループのパフォーマンスへの反論及び評価をさせる。 															

7次 (1時間)	○パフォーマンス課題への取り組み6 ・個人でパフォーマンス課題に取り組ませる。 ・クラスを代表して数名の生徒に作品を発表させる。
8次 (1時間)	○単元のまとめ ・提出された作品の幾つかを取り上げ、クラスでの共有化を図る。

5 本時の展開

	学習活動 (生徒)	指導上の留意点 (教員)	評価の観点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 各グループの代表者は、本時のワークシートを取りに来る。 グループごとに机をまとめる。 グループ内の役割を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表の準備を指示する。 	
展開 40分	<ul style="list-style-type: none"> 各グループの代表者は、パフォーマンスを披露する。 代表者はパフォーマンスの後、黒板にフリップを掲示する。 各グループのパフォーマンスの概要について、ワークシートにメモをとる。 他のグループのパフォーマンスに対して、反論や質問をする。 グループとして他のグループのパフォーマンスを評価する。 	<ul style="list-style-type: none"> 3分以内で発表することを指示する。 記入状況をT.T. (研究員2名)とともに巡回し確認する。 反論や質問が多い場合は時間で区切る。 授業者及びT.T.もグループパフォーマンスを評価する。 	思考・判断・表現
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> 次時の活動内容を知る。 ※時間内にパフォーマンスを披露できなかったグループがある場合は、次時に行く。 	<ul style="list-style-type: none"> 個人でパフォーマンス課題に取り組むことを予告する。 個人で取り組むパフォーマンス課題とグループで取り組んだパフォーマンス課題との違いについて説明する。 	

6 評価手法

(1) パフォーマンス課題

「にしがま線」

A君は、西尾市幡豆地区に住んでいる高校2年生である。年明けの1月に、地元の公民館で「赤い電車 (M鉄道の愛称)」を存続させるのか廃止させるのかどうするかについて、住民集会が開かれる。A君は、その時の高校生代表の一人として、意見を述べなければならない。存続させるためには、自治体がM鉄道側に支援金を毎年2億5千万円支払わなければならない。その住民集会には、赤い電車の存続に賛成の人も反対の人も、また、どちらかに迷っている人もいる。そして、M鉄道の代表者の方も参加される。

あなたがA君だったら、さまざまな立場の人の前で、どのような意見を述べますか？

(2) ルーブリック（6次＝グループパフォーマンス用） ※（ ）内は配点

	「読解力」「他者理解」「批判的思考力」「表現力」
A	鉄道の存続または廃止に関して、対立する他者の意見を認め、その根拠となる先哲等の思想に理解を示した上で、結果として予想される倫理的課題を挙げて反論している。そして、自身の意見を示し、根拠となる先哲等の思想を挙げてその正当性を述べている。また、内容に矛盾はなく、分かりやすい。(3点)
B	鉄道の存続または廃止に関して、「対立する他者の意見の根拠となる先哲等の思想の解釈」、「その結果として予想される倫理的課題」、「自身の意見の根拠となる先哲等の思想の解釈」、「発表の整合性及び分かりやすさ」の4項目中、1～2項目について内容が不十分である。(2点)
C	鉄道の存続または廃止に関して、「対立する他者の意見の根拠となる先哲等の思想の解釈」、「その結果として予想される倫理的課題」、「自身の意見の根拠となる先哲等の思想の解釈」、「発表の整合性及び分かりやすさ」の4項目中、3～4項目について内容が不十分である。(1点)

(3) ルーブリック（7次＝個々のパフォーマンス用） ※（ ）内は配点

	他者の意見の受容力, 論理的思考力	読解力, 意思決定力	課題解決力
A	グループワーク及び発表を通して他者の意見を共有することで、当初の自身の考えが深まったこと、もしくは考えが変容したことを、他者の意見に同調または反論する十分な根拠を挙げた上で、分かりやすく論理的な文章で述べている。(10点)	鉄道の存続または廃止に関する当初及び最終的な意見を明確に示し、先哲等の思想を根拠にそれぞれの正当性を述べている。(10点)	鉄道の存続または廃止の結果として予想される倫理的課題を明らかにし、その上で学習の成果として導き出された課題解決のための具体的かつ説得力のある方策を提案している。(10点)
B	グループワーク及び発表を通して他者の意見を共有することで、当初の自身の考えが深まったこと、もしくは考えが変容したことを述べているが、他者の意見に同調または反論する根拠が不十分である。 もしくは、他者の意見に同調または反論する十分な根拠が挙げられているが、文章の分かりやすさ及び論理性に問題がある。(5点)	鉄道の存続または廃止に関する当初及び最終的な意見を明確に示し、先哲等の思想を根拠にそれぞれの正当性を述べているが、いずれかの思想の解釈が不十分である。(5点)	鉄道の存続または廃止の結果として予想される倫理的課題を明らかにし、その上で課題解決のための方策を提案しているが、具体性または説得力に欠ける。(5点)
C	当初の自身の考えが深まったこと、もしくは考えが変容したことを述べているが、他者の意見が反映されていない。 もしくは、他者の意見が反映されているが、同調または反論する根拠が示されていない。(1点)	当初及び最終的な意見を明確に示し、先哲等の思想を根拠にそれぞれの正当性を述べているが、いずれの思想の解釈も不十分である。 もしくは、いずれかの意見の思想的な根拠が挙げられていない。(1点)	鉄道の存続または廃止の結果として予想される倫理的課題が明らかにされていない。 もしくは、課題解決のための方策が示されていない。(1点)

イ 研究授業，研究協議を終えて

(ア) 研究授業

平成27年1月13日の第5限に，本校2年生の文系クラス（男子11名，女子30名，計41名）で研究授業を行った。前回の反省を踏まえ，今回の研究授業ではさまざまな工夫を凝らした。まず発表者は，自身が所属するグループの立場（存続または廃止）及び解決策の理論的根拠とした思想家名を記したフリップを持ち，発表後はそれを黒板に掲示した。次に，他のグループは発表内容のメモを取りつつ，フリップも参考にしながら発表に対する質問及び反論を考えることとした。そして，質問及び反論に対する応答の後，他のグループを評価する活動を取り入れた。発表者だけではなく，全ての生徒が授業に集中し，主体的に参加することをねらった。

【資料4 質問風景】



実際には，参観する教員の数に圧倒され，発表者はもちろんのこと，どの生徒も緊張せざるを得ない状況にあった。発表後に沈黙が続き，淡々と次の発表者に交替していく中，授業の後半になってようやく質問をする生徒が現れ（資料4），それを機に活発な議論が交わされることとなった。生徒の成長を感じることでできた場面であり，授業は生徒のものであって，教師のためのものではないと改めて肝に銘じた。

(イ) 研究協議

多数の出席者に恵まれ，研究協議も盛況であった。熱を帯びた意見も数多くあり，予定した時間を超過してしまった。以下に，僅かではあるが研究協議における意見等を紹介する。

<意見・感想等>

- 生徒は授業にしっかりと取り組んでいた。身近な話題を取り上げたことがよかったのだと思う。根拠とした思想を文章にして提示できれば，なおよかった。
 - 50分の授業で全てのグループ（10グループ）に発表させることには無理があった。2時間に分けてじっくり取り組ませてもよかった。
 - 活動できていたことに満足してはいけいない。本時で言えば，思想家の考えに沿って反論できていなければならないはずである。政治的・経済的な側面からの意見や反論が多かった。
- <土屋武志教授，柴田好章准教授の御指導>
- 最後に生徒の主体性を引き出すことができた。本日の授業における生徒の姿を映像にし，それを教員研修等で見せることができることよい。この取組がよいものであることは，大抵の教員が気付くはずである。
 - 身近な話題を取り上げ，単元の開発からチャレンジしたことに敬意を表したい。また，授業の中で発表者の一人が質問されて困り，グループに持ち帰った。困った姿を皆の前で見せられる学習環境が素晴らしい。困ることは学ぶことのチャンスである。困った時こそ思想家に尋ねるという活動があると，学びは更に深まったであろう。
 - 発表を聞いただけで評価することは教員でも難しい。端的に評価できるよう工夫が必要である。

ウ 検証 ルーブリックを用いた評価について

本時においては，ルーブリックを用いた生徒間の相互評価を試みたが，消化不良であったことは否めない。意見や反論を考えることと，他グループを評価することのいずれにも手が付かず，とまどう

生徒の姿が確かに多く見られた。単元における位置付けを考えれば、本時は意見や反論をグループで考えさせ、発表する側は反論等にグループで対処させるという時間に充てるべきだった。

一方、個々の作品を評価するためのルーブリック（7次用）については、精緻に過ぎる感があったが、前回に比べれば基準A、B、Cの区別がしやすくなった。3名の研究員の評価も概ね一致した。なお、研究授業を実施したクラス（41人）の評価結果は以下のとおりである（4クラス全ての評価結果は現在集計中である）。

<他者の意見の受容力，論理的思考力>

A 8人（19.5%） B 25人（61.0%） C 7人（17.1%） ※無回答1人

<読解力，意思決定力>

A 11人（26.8%） B 24人（58.5%） C 5人（12.2%） ※無回答1人

<課題解決力>

A 8人（19.5%） B 30人（73.2%） C 3人（7.3%）

第1回研究授業における評価結果と比べ、評価Cの人数がかなり減っていることが分かる。事前にルーブリックを提示し、期待するパフォーマンスの方向性を明確にしたことも一因として考えられるが、1学期以来、思考活動に関して生徒が経験値を上げた結果であることは間違いない。なお、【資料5】は、3項目のいずれも評価Aと判断した作品である。また、6次に実施したグループパフォーマンスに関する相互評価は、妥当性に欠けるものと判断し点数化を断念したが、個々の作品については点数化し、学年末評価に総括することを考えている。

【資料5 生徒Cの作品】

私は、思想家サルトルの述べる「日常使う道具は、ある目的を達成する手段であって、その性質はあらかじめ決まっている。しかし、人間は道具とは異なる。人間は将来を選ぶ自由をもち、自分自身をつくりあげていく存在である」を参考に考えました。2つの角度から考えることができ、私は初め、存続に賛成でした。しかし、班で話し合う中で具体的な数字を調べ、班員それぞれの意見を聞き、納得した上で反対意見に変わりました。人間は道具を変えることだって、お金を今よりかけないように工夫することだってできます。したがって電車にこだわらず、バスに変えたり、D君が言ったように線路を再利用したりすれば便利だし、交通手段で困ることはないだろうと思いました。しかし、他の班の発表とそれに対する質問や議論で私の思いは当初の存続賛成に大きく動かされました。バスやタクシーみたいなものを設置すれば確かに安くて便利です。もしかしたら赤字も減るかもしれません。しかし「存続か廃止か」の討論が出て時間は経っているはずなのに廃止されていません。むしろ存続を望んでいるようないろいろな活動が行われています。市民や利用者にとって、赤い電車はそれだけ大事なものと分かります。がんばっている人もいて、今まで私たちが使ってきたものを簡単に壊してもいいのかと考えるときみしくなります。サルトルのいう「人間は道具とは異なる」とは、道具を変えずともそれを守るための策を考え、実行できる力を人間はもっているということだと私は解釈しました。市民の気持ちを考えてずっと使ってきた電車を守ることがよいと思いました。

5 実践のまとめと考察

生徒のパフォーマンス課題への取組を見る限り、グループワークにおける役割分担を自主的に行い、各々の責任を全うしようとするなど、自主性は随分と育ってきたように思う。第2回研究授業では、教科書に載っていない思想家について調べてきたグループが複数現れるなど、予想を上回る意欲的な取組には驚かされるばかりであった。また、思考を論理的に説明することや、根拠を明確にして判断

を下すことについては、経験を重ねるごとに無理なく論を進められる生徒も増え、研究員が生徒に身に付けさせたいと考えた力について、成長を実感できるまでになった。

ループリックについては、記載等に関してまだまだ悩むところが多い。複数の研究員で評価をするために、ループリックを精緻にすると生徒のパフォーマンスの幅を狭める恐れがある。しかしながら、大まかに記載すると評価の信頼性は低下する。第2回研究授業の振り返りにおいては、「ループリックが難しい」「ループリックを理解できたのか理解できなかったのか分からない」という感想が半数以上を占めたことも事実である。欲張らず焦点化する勇気も必要だと感じる。生徒の実情に合致したループリックをつくるためには、継続的な研究と実践が不可欠である。

6 成果と課題

(1) 実践の成果

9割を超える生徒が、第1回研究授業時に比べ、第2回研究授業後の作品において記述量を大幅に増やしていることは、成果として顕著である。パフォーマンス評価に関する一連の取組は、生徒の学習意欲を喚起するに十分であった。そして、研究が進むほどに、考えることを億劫がらず、明確な意思の表明を躊躇しない生徒たちを見るにつけ、頼もしさすら感じた。その意味で、今回の取組は、これまで焦点を当ててこなかった生徒の能力を引き出す端緒になったと言える。冒頭で述べた「解決に向けて自ら課題に取り組む自主性と、他人に流されない自律心」を育成するという研究の目的は、達成方向に進んでいる。

(2) 今後の課題

先哲等の思想の表面的な解釈や、深い理解に依らない知識の活用は、第2回研究授業後も課題として残った。学習の土台を盤石なものにすることの大切さは、倫理の授業に限らず揺るぎのないものであり、改めて次年度に向けた改善策の検討が必要である。なお、批判的思考力や課題解決力の測定、及び市民性の育成等、十分に取組みなかった内容については、引き続き次年度の課題としたい。

7 おわりに

今回の取組については、他教科の教員の関心も高く、本校は学校を挙げた授業改善の大いなるチャンスを得たと言える。次年度は地理歴史科での実践を予定しているが、この取組を期間限定のイベントで終わらせないためにも、他教科と足並みを揃えて授業改善に臨みたいものである。なお、他教科への広がりに関連して言えば、本年度は国語科教員の協力を得て、モラルジレンマ教材「大津波」のアレンジを行った。教科独自の教材開発にとどまらない、教科の垣根を超えたパフォーマンス課題づくりは、本校における今後の教育活動に新たな可能性を示せたように思う。

一年間を振り返り、この研究は個人で抱えられる類のものではなく、チームとして事に当たるべきものであると実感している。今は少人数のチームに過ぎないが、徐々にその輪が広がり、生徒のさまざまな能力を引き出すべく授業が本校に根付いていくことを願って止まない。

参考文献等

○文部科学省『高等学校学習指導要領』平成21年3月公示

○荒木紀幸監修、道徳性発達研究会編『モラルジレンマ教材とする白熱討論の道徳授業 中学校・高等学校編』明治図書、2013年

○小川仁志監修『まんがと図解でわかる正義と哲学のはなし（別冊宝島）』宝島社、2011年

○S. フリートレンダー著、長倉誠一訳『子どものためのカント』東京未知谷、2008年